
リトルマーメイド

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルマーメイド

【Nコード】

N3219R

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

夏休み。明信が海で出会った女の子はまるで人魚のようで。小学生の初恋のお話です。

第一章

リトルマーメイド

海だ。彼は今そこにいた。

源口明信は今一人海にいた。地元なので毎日来ていた。

白い砂浜の向こうに青い海が何処までも広がっている。その海を見てだ。

そうしながら泳いでいた。初夏の海にはまだ誰もいない。

まだ海水浴客の姿はない。それで静かで綺麗な海を楽しんでいるのだ。

海の中に入りただひたすら泳ぐ。朝から夕方までだ。小学校は当然夏休みだ。彼の泳ぎを邪魔する者は誰もいない。筈だった。

しかしだった。ふと海の中から顔をあげた彼にだ。声をかける者がいた。

「ねえ」

「あれっ？」

「こっちよ」

女の子の声だった。小さな声だ。

「こっちこっち」

「こっちって」

「だからこっちよ」

声は後ろからだった。その後ろを振り向くとだ。

そこには女の子がいた。あどけない笑顔の女の子だ。髪はおかっぱにしている目は黒めがちだ。白い歯を見せながらの笑顔だった。

「あれっ、どうしてここに」

「ここにいたら駄目なの？」

「人間ならいいよ」

こっ返す明信だった。その日によく焼けた真っ黒な顔で言う。歯の白さと目の黒さはそれでもわかる。そのスポーツ刈りの頭もだ。

その顔でだ。女の子に対して言うのだった。

「河童とかじゃなかったらね」

「海に河童がいるの？」

「いるんじゃない？そりゃ」

こつ女の子に返す彼だった。

「やっぱり」

「そうなのかしら」

「ひよつとしたらさ」

またいう彼だった。

「いるかもね」

「そうなの。じゃあ私は河童なのね」

「そうなの？まさか」

「だったらどうするの？」

女の子は笑顔で言ってくる。

「胡瓜でも食べさせてくれるのかな」

「うちコンビニだから」

「胡瓜はないの」

「あるけれどサラダだよ」

「あつ、私サラダ好きだから」

こつ言ってきた女の子だった。

「よかったらね」

「うん、それじゃあね」

「それじゃあ今は」

女の子の方からの言葉だった。

「何をしてるの？」

「見ればわかるじゃない。泳いでたんだよ」

こつ返す明信だった。

「ずっとね。この海でね」

「やっぱりね。そうなのね」

「君もだろ？それは」

「ええ、そうよ」

その通りだというのだ。これが女の子の返事だった。

「私もね。ずっと泳いでるのよ」

「一人だって思ってたのに」

明信は海から出しているその顔を傾げさせた。そのことに何処か残念なものを感じていたのだ。独占したものが奪われたような気持ちだった。

「違ったなんてね」

「まあそれはいいじゃない」

「いいのかな」

「気にしないの。それよりもね」

「うん、それよりも」

「泳いでるのは私も同じだから」

またこう言ってきたのであった。

「だからね。一緒にね」

「泳ごうっていうの？」

「嫌？」

女の子は楽しげに笑って明信に尋ねてきた。

第二章

「私と一緒に泳ぐの。嫌？」

「別にそんなこと言っていないじゃない」

「明信は女の子に対して言い返した。」

「一つもね」

「じゃあいいわよね」

「うん、いいよ」

「これが返事だった。そしてだ。」

二人は並んで海を泳ぎだした。何時間も、何時間も。

泳ぎながらだ。話もするのだった。

「それでだけれどさ」

「どうしたの？」

「女の子が明信の言葉に応える。」

「君何処から来たの？」

「何処からって」

「そうだよ。何処からここに来たんだい？」

「また女の子に尋ねる。」

「一体何処から」

「広島からなの」

「広島から？」

「そう、瀬戸内の島でね」

瀬戸内は実に多くの島がある。そこに住んでいれればだ。泳ぐ機会に恵まれている。だからそれで今も泳ぐのが上手いというのだ。

「そこで暮らしてたの」

「そうだったんだ。それで」

「泳ぐのは得意よ」

笑顔で言う彼女だった。

「それはね」

「だからなんだ」

「そうなの。それでなの」

「じゃあ」

ここでまた問う明信だった。相変わらず泳ぎながらだ。

「今度はね」

「ええ。今度は？」

「名前は？」

次に尋ねたのはそれだった。

「名前は何ていうのかな」

「摩耶っていうの」

「摩耶？」

「そう、神名摩耶」

名字まで言うのだった。

「神名摩耶っていうの」

「ふうん、いい名前だね」

「そうかしら。私のいたところじゃ多い名前よ」

「摩耶って名前が？」

「神名っていう名前よ」

名字の方がだというのだ。そちらだというのだ。

「この名字は私のいた島じゃ普通だったのよ」

「普通って。そんなに多かったんだ」

「私の島はね」

また言うその摩耶だった。

「この名字が本当に多いのよ」

「親戚とか？皆」

「ううん、たまたま名字が同じだけ」

つまり維新の時に多くの人間がその名字を選んだということなのだ。その土地の名前を皆で名字にしたりといったことが維新の時には多かったのだ。だが摩耶も明信もまだこのことは知らない。子供だからだ。

「それだけなの」

「ふうん、何か面白いね」

「面白い？」

「うん、面白いね」

また言う明信だった。

「そういつのつて」

「ううん、私は別に」

「面白くないんだ」

「別にね」

これが摩耶の返事だった。

「面白いつて思ったことないから」

「そうかな」

「まあそれは人それぞれね」

「そうだね。じゃあね」

「今度は何なの？」

「何処まで泳げるか勝負しない？」

彼女のことをある程度聞いたうえでだ。明信はこう彼女に提案したのだった。楽しく笑いながらだ。そのうえで提案であった。

「これからね」

「何処までなの？」

「あそこまでね」

かなり前を指差す。するとだった。

そこにはだ。小島があった。岩の小島である。彼はそこを指差すのだった。

「あそこまで泳げるか勝負しない？」

「一キロはあるわよね」

摩耶はその小島を見て距離をざっとであるが予測した。

第三章

「多分」

「充分にあるよ。どうか」

「やるわ」

摩耶はすぐに答えた。

「勿論ね」

「言うね、本気？」

「本気よ。瀬戸内じゃこれ位の距離は普通だから」

「普通なんだ」

「普通に泳いできたわ」

また言う摩耶だった。

「だからね」

「平気なんだね」

「いけるわ」

強気の言葉だった。

「そっちはどうなの？」

「僕？」

「ええと、名前は」

「源口明信っていうんだ」

ここで彼も名乗ったのだった。その名前をだ。

「それが僕の名前だよ」

「ふうん、源口君ね」

「ああ、明信でいいよ」

気さくに笑って返す明信だった。

「それでね」

「そうなの。明信君ね」

「それで呼んでくれていいよ」

「わかったわ。じゃあ昭信君」

「うん」

「速さは競争しないのね」

それはどうかというのだった。

「それは」

「したい？」

「まあそこまではね」

しないというのだった。これが明信の返答だった。

「いいかな」

「あくまで距離だけね」

「そう、ここは鮫もいないし」

それは出ないというのだ。幸いなことにだ。海といえば最も怖いのはそれである。鮫が出て来ればそれだけで大変なことになってしまふ。

「だから問題は」

「何処まで泳げるかね」

「泳げないと思ったら諦める」

彼はこのことも言った。

「溺れたら終わりだから」

「わかったわ。それじゃあね」

「行こうか」

「ええ」

こうしてだった。二人はその小島に向かって泳いでいく。そしてその競争は。

どちらもだった。小島に着いたのだった。明信はそこにあがって一休みする。そしてそれは摩耶もだった。彼女もそうしたのだ。

摩耶も水着だった。黒のワンピースだ。明信はその水着を見てだ。少しだけどきりとした。それでその彼女に言った。

「ねえ」

「何？」

「水着だったんだ」

「当たり前じゃない」

摩耶はくすりと笑って彼に答えてきた。彼女は小島の岩のところに体育座りをしている。明信は胡坐をかいてそれで座っている。

「海の中にいるし」

「そういえばそうか」

「そうよ」

こう話す摩耶だった。

「普通の服で入ったら泳げないじゃない」

「服が水吸って重くなってるね」

「私だって服着てたらとても泳げないから」

「僕もだよ。それはね」

「無理だよ、やっぱり」

「うん、無理」

その通りだと答えるのでした。

第四章

「それはね」

「そうでしょ？だから私だって」

「水着なんだ」

「そういうこと。誰だって無理よ」

「そうだよ。考えてみれば当然か」

「そういうことよ。それでだけれど」

今度は魔矢の方から言ってきた。

「私もちゃんと着いたでしょ」

「そうだね」

明信はこのことに話が戻ってきたことに少し戸惑った。それまでの水着のことが頭に残っているからだ。それで戸惑っているのである。

それでもだった。何とか落ち着いてた。摩耶の話聞くのだった。

「それは本当にね」

「どう？凄いでしょ」

摩耶は自慢げな顔で明信に言ってきた。

「泳ぐことには自信があるからね」

「言うだけはあるね」

「将来は水泳選手になれるかな」

「なれるんじゃないの？ちゃんと」

明信は少し真剣にその言葉に頷いた。

「ずっと泳いでいったら」

「泳ぐわよ、私」

摩耶は実際にそうすると答えた。

「泳ぐの大好きだし」

「そうすればいいよ。それじゃあだけれど」

「戻るのね」

「戻るだけの体力ある？」

今度はそれが心配だった。明信は摩耶に問い返す。

「それは。ある？」

「あるわ」

返答は一言だった。

「ちやんとね。あるから」

「そう、あるんだ」

「今度も競争？どれだけ長く泳げるか」

「いや、もうそれは止めよう」

「しないんだ」

「うん、止めよう」

そうするというのである。

「後は帰るからそれをして意味がないからね」

「帰るだけだからなのね」

「そう、だからね」

それでだと話すのである。

「もう競争は止めよう」

「速さは競わないの」

「速さを」

「距離だけ競争してもあれじゃない。それはどうかしら」

「ううん、どうしようかな」

「私はいいわよ」

今度は挑発する顔になっている摩耶だった。表情がめまぐるしく変わる。

「それでね」

「言うね。本当にやるつもりなんだ」

「本気よ、それはね」

「どうしようかな」

「やらないの」

「いや、やるよ」

明信もだ。決めた。摩耶の言葉に乗ることにしたのだ。

それでだ。早速海の中に足から飛び込んだ。その海の中から摩耶に対して言うのだった。

「今からね。岸にどっちが先に着くかね」

「競争ね」

「そうだよ、競争しよう」

今度はその競走だと言う。摩耶の言葉に乗ったのである。

そうしてだ。摩耶も海の中に飛び込んだ。ちゃんと手を揃えてそこから入る。競泳の飛び込みをしてみせて入ったのである。

それからだ。また話す彼女だった。

「今から競争よね」

「うん、そうしようか」

「よし、それじゃあね」

こうしてだった。二人は平泳ぎで競争をした。先に着いたのは。

同時だった。二人同時に岸に着いた。その時はもう夕暮れだった。その夕暮れの中で海にあがったうえでだ。二人は話すのだった。

それまで青かった空も海も赤くなっている。とりわけ海は赤くなりそこに銀色の波が輝いている。二人はその海と夕焼けを見ながら話す。

第五章

「引き分けね」

「そうだね」

「勝てる自信あったのよ」

摩耶はこう明信に話す。その二つを見ながらだ。

「実はね」

「そうだったんだ」

「けれど引き分けなんてね」

「僕だって負けるつもりなかったし」

「それでなの」

「そうよ、それでよ」

また話す彼女だった。

「残念だわ」

「こっちだってだよ」

「引き分けだったことが残念なのね」

「こっちだって勝つ自信あったからね」

「言うわね」

「だって自信あったから」

だからだと言うのだった。明信も本気である。

「折角だったのに」

「じゃあ勝負はね」

「勝負は？」

「次ね」

摩耶はくすりと笑って述べた。

「次に決めましょう」

「次になんだ」

「そうよ、次にね」

また言う彼女だった。

「決めましょう。それでいいわね」

「うん、それじゃあね」

こう話してだった。二人は約束したのだった。

それからだ。明信はこう言った。

「それじゃあ」

「今度は何？」

「家に帰らないとね」

現実を話すのだった。

「これからね」

「ああ、お家ね」

「帰らないとね。もう夕方だしね」

「そうね。じゃあ私もね」

「今度会ったその時にね」

「ええ、いいわよ」

摩耶はくすりと笑ってだ。明信に言ってきた。

「その時こそね」

「決着をつけよう」

夕焼けの中で顔を見合わせて約束する二人だった。しかしだ。

明信はそれから毎日この海で泳いだ。だが摩耶には一度も会わなかった。そしてそのまま夏休みが終わってしまったのだった。

「何処に行ったのかな」

このことに寂しさを感じていた。やはり急に会えなくなったからだ。そのことを残念に思いながら学校に向かう。二学期であった。

そしてその最初の朝のホームルームでだ。教壇に立つ先生が言ったのである。

「転校生を紹介するぞ」

「えっ、転校生って？」

「いたんだ」

「夏休みにはもう来ていたが学校は今日からだからな」

先生は若い男の人だ。引き締まり逞しい身体つきをしている。そ

の先生が行ってきたのである。

「だからな。いいか」

「はい、わかりました」

「それで先生」

「その転校生ってどんな子なんですか？」

生徒達の質問はすぐにそこに至った。

「男の子ですか？女の子ですか？」

「どっちなんですか？」

「女の子だ」

先生はまずは性別について答えた。

「これで喜ぶ奴が絶対にいるな」

「まあそれは」

「女の子ならね」

「よかったわよね」

女の子の間からの言葉だった。この時期は男の子は男の子、女の子は女の子で集まる傾向がある。それで女の子から言葉が出たのだ。

「それでどんな娘なんですか？」

「頭がいいんですか？」

「それともスポーツが得意なんですか？」

「それは会ってからわかることだな」

先生は笑って話すのだった。

第六章

「それじゃあ今からな」

「よし、それじゃあ」

「その娘何処にいるんですか？」

「今ここにいますか？」

「入ってくれ」

先生は教室の入り口に顔を向けて告げた。

「今からな」

「はい」

こうしてその娘が入って来た。するとだった。

その娘を見てだ。明信が思わず声をあげてしまった。

「えっ、まさか」

「嘘っ、この学校だったの」

摩耶だった。彼女も呆然として言うのだった。

「それでこのクラスだったの」

「あれっ、知り合い！？」

「二人共ひよっとして」

「知り合いだったんだ」

周りは二人の言葉を聞いてこう言うのだった。そうしてだ。

そのホームルームのあった日の放課後にだ。二人は話をした。ま

だ空も海も青い白い砂浜を歩きながらだ。話をするのだった、

「いや、驚いたよ」

「私も」

明信も摩耶も呆然としながら話すのだった。

「こんなことになるなんてな」

「一緒のクラスになるなんてね」

「僕もさ」

まず言ったのは明信だった。

「今凄い驚いてるんだけれど」

「だからそれ私もだから」

「そっちなんだ」

「そうよ」

摩耶は砂浜を明信と共に歩きながら答える。

「心臓が飛び出るかと思ったわ」

「何か大袈裟だね」

「大袈裟じゃないわよ」

こつ返す彼女だった。

「本当に驚いたんだから」

「だからそれは僕もだよ」

「あんたもなのね」

「そうだよ。それでさ」

「ええ、何？」

「夏休み途中からいなくなっただけれど」

彼女にこのことを話すのだった。

「それはどうしえなのかな」

「ああ、それはね」

「何かあったの？」

「島に帰ってたの」

摩耶は明信に顔を向けて話した。今も実に日によく焼けた顔をしている。

第七章

「実家のね。その島のね」

「何かあったの？」

「親戚が死んだのよ」

それでだというのである。

「それでね。後は旅行に行つて」

「それでだったんだ」

「そう、シンガポールに行つてたの」

「また随分遠いところに行つてたんだね」

「遠いかしら。飛行機だったらすぐよ」

「そうなんだ」

これはまた明信には実感のないことだった。彼も家族で海外旅行に行つた経験がある。韓国や台湾にそれぞれ一回行つているのだ。

それでこう話すがだ。それでもだった。

実感が湧かないのだった。シンガポールが近いと言われてもだ。

それで首を傾げさせる。そこにであった。

また摩耶が言つてきたのだった。

「それで夏はいなかったのよ」

「そうだったんだね」

「御免ね、急にいなくなつて」

「いや、それはいいよ」

いいというのだった。

「別にね。そつちにも事情があるんだし」

「有り難うね。そう言つてくれて」

「それもいいよ。ところでさ」

「ええ。ところで？」

「あの話覚えてる？」

話が一段落したところでまた話すのだった。

「それで」
「ああ、あのことね」
「ほら、泳ぐのの競争だけれど」
「この学校クラブあるわよね」
「摩耶はこんなことを言ってきた。」
「それとスイミングスクールと」
「どっちもあるよ」
「クラブに水泳部あるわよね」
「うん」
「明信は摩耶の問いにそのまま答えた。」
「あるよ。ちゃんとね」
「じゃあそこに入って」
「あつ、ちよつと待って」
「ここで摩耶の言葉を遮って話したのだった。」
「僕が入っているかどうかは聞かないのかな」
「いえ、入ってるでしょ」
「どうしてそう言えるの？」
「何となくね。直感でね」
「それでなの」
「そうよ。けれどその通りでしょ」
「まあね」
「その通りだとだ。摩耶に対して答えた。」
「それはね」
「あれだけ泳ぐのが上手だとそうよね」
「そこから見た直感だったんだ」
「そういうこと。それでね」
「あらためて彼に問う摩耶だった。」
「私どっちにも入るから」
「それでなんだね」
「決着つけましょう」

にこりと笑って明信に言ってきた。

「それは嫌かしら」

「いいね」

明信はだ。その摩耶に顔を向けて答えた。

「それじゃあね」

「よし、言ったわね」

「言ったよ」

お互いに売り言葉に買い言葉の調子にもなっていた。

「今確かにね」

「言っておくけれど」

摩耶は少しばかり得意げな顔になって話す。

「言った言葉は返ってはこないわよ」

「そっちこそね。わかってるよね」

「勿論よ。それじゃあね」

こう話してだった。二人はまた競争をすることを誓い合ったのだ。夏は終わったがそれでもだ。またこれからはじまるものがあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3219r/>

リトルマーメイド

2011年3月2日22時25分発行